

氏名	小川恒由
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第 3971 号
学位授与の日付	平成 21 年 9 月 30 日
学位授与の要件	医歯学総合研究科病態制御科学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)

学位論文題目	Prevention of biliary complication in radiofrequency ablation for hepatocellular carcinoma—Cooling effect by endoscopic nasobiliary drainage tube (肝細胞癌に対するラジオ波焼灼療法における胆道合併症予防 - 内視鏡的経鼻胆道ドレナージチューブによる冷却効果)
--------	---

論文審査委員	教授 金澤 右 教授 小出 典男 准教授 猶本 良夫
--------	----------------------------

学位論文内容の要旨

主要胆管に近接した肝細胞癌 (HCC) に対するラジオ波焼灼療法 (RFA) は術後に胆管狭窄を起し、胆管炎や肝不全に至ることがある。本研究では RFA 時の胆管熱損傷予防を目的として経鼻胆道ドレナージチューブ (ENBD) を用いた胆管冷却の安全性、有効性の検討を行った。対象は主要胆管に接した HCC 患者とし、RFA 中 ENBD より冷却生理食塩水を注入し胆管冷却を行った。主要評価項目を胆道合併症、二次評価項目を局所再発とし、胆管冷却併用 RFA 患者 14 例 (14 結節)、胆管冷却非併用 RFA 患者 11 例 (13 結節) について解析を行った。局所再発は 2 群間に統計学的差を認めず、胆道合併症率は冷却群において非冷却群よりも有意に低かった (0% vs. 39%, $P=0.02$)。主要胆管近接 HCC に対する RFA において ENBD 下胆管冷却の併用により局所再発を増加させず胆道合併症を予防可能で、RFA の適応を拡大できると考えられた。

論文審査結果の要旨

本研究は、主要胆管に接した肝細胞癌のラジオ波焼灼療法に際して、術後胆管狭窄を予防するために経鼻胆道ドレナージチューブを用いた胆管冷却を併用する場合の安全性と有効性を検討したものである。

研究者はこの方法を用いた肝細胞癌患者群 14 症例 14 結節について、同様の背景を持つが通常のラジオ波焼灼療法を行った肝細胞癌患者群 11 症例 13 結節と比較検討した。その結果、胆道合併症の頻度は冷却群において有意に低かった。また、局所再発は両群に有意差を認めず、冷却によるラジオ波焼灼療法の治療効果減弱は見られないことがわかった。ラジオ波焼灼療法は現在肝細胞癌患者局所治療の標準的な方法となっているが、熱による胆管損傷が最大の合併症のひとつである。本研究によりそれが防げてなおかつ局所制御率も損なわれない方法があることが統計的に示されたことは、ラジオ波焼灼療法の適応を拡大する意味で極めて有意義であると考えられる。

よって、本研究者は博士 (医学) の学位を得る資格があると認める。